ＪＲ東海労なごや

2009年６月23日　No．768号
JR東海労名古屋地方本部
発行者：　丹　羽　成　生
編集者：　教　宣　部

2つの慰霊の日　64年目を迎えた沖縄忌

６月23日、今年も沖縄は『慰霊の日』を迎えます。
15年に及んだ戦争の末期、日本で唯一、一般住民を巻き込んだ壮絶な戦闘が沖縄で展開されました。20万人を超える戦死者のなかで94，000人あまりが一般の人たちでした。

銃撃や爆弾での犠牲のみならず、追いつめられた日本軍に自決を強いられ幼子の命をその親が絶つなど悲惨な惨劇か繰り広げられました。一般には日本軍の司令官が自決し組織的な戦闘が終わった日が6月23日でした。その日を『沖縄慰霊の日』として毎年慰霊祭が開催されます。沖縄忌として沖縄全体が喪に服します。

沖縄県主催で『沖縄全戦没者慰霊祭』が摩文仁（まぶに）の丘にある平和記念公園で行われます。最近ではテレビの全国中継もされ大々的に開催されます。

もう一つの慰霊　「魂魄（こんぱく）の塔」

沖縄の悲劇は戦闘終結後も続きました。衣食住すべてを破壊された村民はまず食料作りのため土地を耕作地にしなければなりませんでした。しかし、そこには戦闘で犠牲になった遺骨がそこかしこにありました。米軍は反米感情を恐れ遺骨の収拾を許してくれませんでしたが、金城和信村長さんの人力で遺骨収拾が認められました。集められた遺骨は住民の手により建立された慰霊塔に納められ『魂魄（こんぱく）の塔』と名付けられました。沖縄の人たちにとって、ここは先祖のお墓のような意味があると言われています。「慰霊祭」が摩文仁（まぶに）の丘で行われている今でも、沖縄の人たちの多くはここで犠牲になった家族や身内の冥福を祈っています。

しかし、1979年復帰後の沖縄に国が国立戦没者墓苑が建立されると「魂魄の塔」に眠る遺骨を強引にそちらへ移してしまい、ここでも犠牲者は国の思惑に振り回されてしまいました。ちなみに魂魄（こんぱく）とは浮かばれない魂の意味だそうです。

いま平和を語るとき、あたかも過激派か反逆児扱いされる時代になってしまいました。平和を願う気持ちは、平和ボケでかたづけられ、憲法を改悪して軍隊ぐらい持たないと平和は守れないという乱暴な意見が力をもちつつあります。

このような時代だかこそ、6月23日のこの日一度戦争とは何かを考えようではありませんか。